

HOT INFORMATION ABOUT

ヘミングウェイ化ヨーロッパ

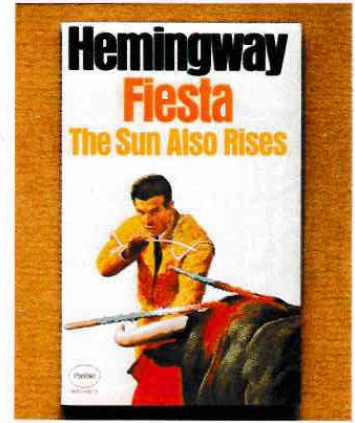
「武器よさらば」「日はまた昇る」「誰かのために鐘は鳴る」など、ヨーロッパを舞台にした長編小説を書いたヘミングウェイの、ヨーロッパ文化への深い理解には、それらの小説を、くりかえし読むごとに感じさせられます。通りいっぺんのことを書き、ちんぷな風景写真と不十分な地図で、お茶をにごした、旅行ガイドを読むよりも、彼の小説を読むことのほうが、よっぽどヨーロッパの奥ふところを知る手がかりとなってくれるでしょう。

「武器よさらば」では、北イタリアから、恋人とともに、国境の湖を渡って、スイス領へ越境するさまが描かれています。「誰かのために……」や「日はまた昇る」には、スペインやパリが舞台になっています。

この作家は、スペイン人も驚きかつ敬愛するほど、闘牛にもくわしい知識を持ち、その描写には、リアリティーが光っています。また釣を愛した彼の描く、パンブローナ郊外の釣の情景にも、男の世界が巧みに描かれています。フランス語、イタリア語、スペイン語をあやつった彼は、土地の人々や風物のふところ深く、入りこんでいく特別な才能に恵まれていたのでしょう。

競馬にも強かった彼は、よくオートイクなどの、パリの競馬場にも通いました。その辺の話は、A.E.ホッチナーの伝記「パピ・ヘミングウェイ」によくわしく描かれています。この本は、実際によくヘミングウェイの問はず語りをまとめた本で、キューバ、パリ、スペイン、ヴェニスなどを旅しながら、ヘミングウェイがホッチナーに話したこと全てを収めています。

彼が行った店、土地ごとの料理、出逢った人々、闘牛や競馬など、どのページを読んでも、旅のすばらしさを感じます。ヨーロッパへ行った、というのは、実はこれくらい歩き、またいろいろな物に目をむけて、はじめて言える言葉だと思わされるのです。



アフリカ熱

チャーター・フライトを利用した、アフリカ旅行が今年の話題。ファッションのテーマにも、今年はアフリカ風がとりあげられ、ミラノ・コレクション以降、アフリカ熱がさかんようです。地中海クルーズの海で、対岸のチュニスへ渡ったり、はるばるスペインを経由レ・ジブラルタルからアフリカに入るルートも人気があります。

自然へのあこがれからか、地中海の対岸であるアフリカの自然を見に、ヴァカンスに出かける人が今年も多いでしょう。

数年周期で流行するアイテムですが、このところ、野性動物の毛のプリントが、また人気上昇中。ジャガーやゼブラのプリント、そしてジャングルのようなプリントが流



人形のコレクション

ヨーロッパを旅したら、ぜひアンティークの人形が欲しい、と思っていられしやるならパリ6区、セーズ通り界隈を歩いてごらん下さい。日本でなら数10万はする「ジュモ」の近い人形も、この界隈の人形屋さんでなら、割安に買えるはずですから。

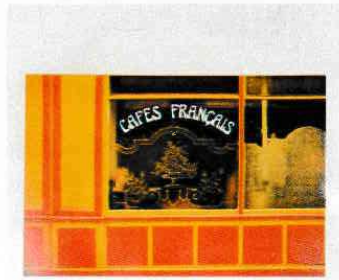
クリニャンクールやモントルイユの蚤の市で、早朝から探し歩くのも手ですが、確実なのは、やはり専門店を訪ねることです。10世紀の自動人形が、なにげなく飾ってあったりします。動いている自動人形が見たいならサンジェルマン教会の裏、ラバイエ通りとブチ・ブーシュ通りとの角の、香水屋さんのウインドウに、いつも華麗に動く貴婦人の人形があります。

本屋さんで「フィニュー」という、アンティーク専門誌を買い、情報を知るのもいい方法ですね。7フランのこの雑誌、毎月号数ばらしい特集を組み、さまざまなアンティークの情報に力を入れています。

今アンティーク界の話題は、1920年代ごろに作られた、陶製のピエロのようです。テラケートな彩色のほどこされた人形、ピンクッション、鏡など、ピエロをかたちどった物への関心が高まっています。

Tiany Chumbard 32, rue Jacob 6e Paris
Mauve 3, ruelles Prênevrs, 1er Paris.
などの店で、このピエロたちが手に入ります。

行中ですし、自然の色アース・カラーが、ここ数年は、ファッションの基調色としてつづくのではないのでしょうか。



カフェ・フランセーズ

ジュース社から出版された、このカフェ・フランセーズ、フランス好きの人々だけでなく、充分楽しませてくれる一冊です。パリ、リヨンなどの伝統あるカフェの、インテリアを、美しい写真に収めたもので、

全ページに、フランス人のエスプリがいっぱい。有名な「ドゥ・マゴック」リッパクロズリー・ド・リラ」などの店々から、田舎道のわきにある、土間のままのカフェなど、「こんな店もあるのか」と驚かされるでしょう。庶民の会談場として、またいいの場として、フランス人にとってなくてはならない場所、それがカフェです。なかには競馬の馬券の買える店、ビリヤードをゲームできる店、いろんなカフェがなんとパリには100mに一軒の割合で並んでいるとか。

カフェには公定価格があって、カウンターの立飲みは、破格に割安だというのをご存知でしたか。椅子席はサービス料が含まれるので高いです。

カフェにもピンからキリまであって、同じコーヒーでも、飲む地域によって、ずいぶんと値がちがいます。にぎやかな街のテラスで飲めば、当然高いコーヒーになるわけですが、それは美人の見物代だと思って、少々はがまんをしなければなりません。ちょっとした裏道などの、小さな店には、やさしいのふれあいが見つけれられます。そういったカフェにこそ、本来のパリの姿があるわけです。

写真の古めかしいタイル絵のあるカフェは、パリ6区、サンジェルマンのセーズ通りにある「カフェ・パレット」という小さな店。美術学校が近く、貧乏学生のため場として、長く人気を保って来た店です。

この店の壁という壁には、金のない若い画家の卵が、コーヒーやサンドイッチの代金がわりに置いていった、彼らの習作が、いっぱいかけられています。未来の西伯が、この中から生まれるのでしょうか。あまり見込みがあるとは言いかねる絵が多いのですが、それでも店主は、気前よく彼らにごちそうをします。これはパリのひとつの伝統で、彼らがかに芸術と芸術家を愛しているかがわかります。1920年代風のこのタイル絵も、陽気な客も、いつも変わらぬパリの風景です。

エッフェル塔物語

1889年のパリ万国博のために建造されたあのエッフェル塔、およそ一世紀も、花のパリの街を、この巨人は見つめてきたわですね。吉比たとはいえ、パリのモニュメントとして、今も人気のある名所です。

この巨大な、当時としては超未来的な鉄が描画されたとき、名だたる建築家の多くコンペに参加し、結局一位になった、ギュダヴ・エッフェル氏のプランが採用され、の名前をいただいて「エッフェル塔」と名付けられたのです。塔の下の広場には、エッフェル氏の銅像があり、この塔を見守っています。ロッセル・エディション出版のレトロシリーズの一冊をひもとくと、この鉄塔コンペに参加した、別の設計者の完成予想図もつたりして、なかなかおもしろいのです。ラス張りの水晶宮と鉄塔の組み合わせを考へた、ローラン氏の作品、ドクレーナ橋の上、一ス河をひとまたぎするような、カシム・ルナル、フランソワ・ナコン氏合作の作など、どれを作っても面白かったような、んな設計ばかりです。

シャイヨー宮から、士官学校までのアナル・フランス大通りの両側に、大きなガリオンが並び、飛行船が空を飛んだ当時、間の未来は明るく輝いて見えたのではないのでしょうか。そのにぎわいを活写した銅版画この本には紹介されています。

当時の人々のどきどきをぬいた、数多くのかけも、この塔には採用されました。そのつが「エスカリエ」つまりエレベーターですね。このエレベーターの変っているところは、垂直に上下するのではなく、「地上が第1階までの57m、そして第2階までの11mまで、脚のカーブにそって、エレベーターは上下するのです。もちろん第3階のプラトホームにも、エレベーターで登れます。3階は地上約300m、パリ市内が一望できるすばらしいビュー・ポイントですよ。

エレベーターは水圧式で上下し、一秒間0.90mのスピードです。

このエッフェル塔を舞台にした、カミの説「エッフェル塔の潜水夫」は、さまざまなしかけに満ちた塔の構造を作って、たくましくトリックを演出して、とてもおもしろいのです。

もし高い所に自信のある人なら、地上から1,652段ある階段を登りつめるのも一興ですね。手すりとは足元の鉄板だけの、風が吹くさす階段を登るのは、なかなかスリルがありますよ。そして登りつめた展望台が、どんなに安心感のある場所であるかを、やっと思いで発見するのです。恐怖にうちかかってたどりついた展望台から見る、パリの町はなんと美しく、もしおなかすいてしまったら、地上57mのレストランで、空中の昼食というも洒落ているではありませんか。

おみやげには、エビナールという、石彫りの製エッフェル塔の組立て模型がいろいろあります。

